

参考資料 1

芥川龍之介署名入り旧蔵書寄贈協力について

◆ 1 本件の概要

寄 贈 者： 南條竹則氏（英文学者）

寄 贈 先： 日本女子大学図書館

寄 贈 資 料： 芥川龍之介署名入り書籍 1 冊（全 7 巻中、未所蔵となっていた Vol.2）

The Sin-Eater; The Washer of the Ford and Other Legendary Moralities

by Fiona Macleod ([i.e.] William Sharp), *The Works of "Fiona Macleod"*, Vol. 2

Uniform edition, (London: William Heinemann, 1912)

資料の特徴： 既所蔵の以下 6 巻は文学者・片山廣子（筆名・松村みね子）の旧蔵書

Vol.1 (1910)、Vol.3 (1912)、Vol.4 (1912)、Vol.5 (1913)、Vol.6 (1912)、

Vol.7 (1912)

弊社の役割： 仲介協力（収蔵実現に向けた調整・橋渡し）

◆ 2 経緯

中野善夫氏の著書『積読の流儀』（2026 年 7 月刊）編集時の校正過程で、本文中 p.328 に記載されている記述の通り、芥川龍之介の署名入り旧蔵書 *The Sin-Eater; The Washer of the Ford and Other Legendary Moralities*（『罪食い』）が、現在、英文学者・南條竹則氏のもとに所蔵されていることを確認しました。また南條竹則氏より「松村みね子旧蔵書」を収蔵する日本女子大学図書館への寄贈を希望する意向を受け、実現に向けての仲介協力を行いました。

◆ 3 本件の意義

本件は、文学史的価値を有する資料の収蔵に加え、文化資産の継承という観点からも意義のある取り組みと考えます。

(1) 未所蔵だった 1 冊が加わり、資料価値が高まる

当該書籍は日本女子大学が所蔵する「松村みね子旧蔵書」コレクションに含まれる *The Works of "Fiona Macleod"*, arranged by Mrs. William Sharp, 7vols, Uniform Edition (London: William Heinemann, 1910) 全 7 巻の資料群のうち、唯一未所蔵となっていた 1 冊です。

このたびの収蔵により資料群が一揃いの完本として保存されることとなりました。

時代や人の記憶を留めた文化的遺産として、全体像を検証することが初めて可能となります。

(2) 文学研究に新しい展望をもたらす文化資源となる可能性

日本女子大学が既に所蔵している6冊（全7巻のうちの計6巻）は文学者・片山廣子（松村みね子）の旧蔵書で、片山の蔵書印が捺されています。収蔵当初より「Vol.2」が欠けていたことが同図書館の原簿記録から確認されていました。

一方、今回新たに収蔵された「Vol.2」には芥川龍之介の署名があります。

資料群全体として、両作家の交流や文学的ネットワーク（※註）を考察するための貴重な文化資源となる可能性があります。

（※註）大正期の軽井沢を舞台にした文人たちの交流が文壇に大きな影響を与えたことはよく知られていますが、とりわけ芥川龍之介は片山廣子に大きな影響を受けた一人でした。芥川は片山との出会いを「才力の上にも格闘出来る女に遭遇した」（「或阿呆の一生」）と記しており、軽井沢から帰京した折に「何やらわからぬ愁心」を持ち帰ったと室生犀星への書簡で打ち明けています。そして芥川は遺書の中で片山への感情を「恋愛を感じなかつた訣ではない」と記していました。

未所蔵となっていた欠本の「Vol.2」は、片山が記念碑的訳業『かなしき女王』を成すにあたって参照した原本です。最も重要な1冊がなぜ欠けているのか、その巻が芥川の旧蔵していた1冊の巻と一致する事実が何を示すのかは、今後の研究が待たれるところです。

両名ゆかりの1冊が今新たな縁を結び、今後の研究に新たな可能性をひらくことが期待されます。

(3) 芥川龍之介没後100年の節目を迎える時期に収蔵が実現

芥川龍之介は2027年に没後100年の節目を迎えます。

その文学的功績を振り返る取り組みや催しが各所で予定されており、社会的な関心があらためて高まる中での収蔵が実現しました。

(4) 文化資産の保存・継承

個人で保存されてきた資料が大学図書館へと寄贈され、公共の文化資産として活用しうるものとなりました。将来にわたって研究者・学生・区民が利用し、次世代へと永く継承していくことが可能となります。これは地域文化への貢献として、学術資源を社会へ開く取り組みです。

弊社は出版文化を通じて、今後も地域文化の発展や学術資源の保存継承に貢献してまいります。

株式会社 国書刊行会